

# その願いをかなえたい…

優秀賞

小倉 サエ子様

## 感動介護を行った職員

合同会社アローズ-ミッション

ラシークケア 中村 彰宏様

「一人暮らしだから自宅で最期までは無理でしょ」と病院から言われた。Mさんは、昔から家族と連絡も取らず長くアパートで一人暮らしだった。飲食しても吐き、痩せてフラフラだったが「自分の部屋で死にたい」と強く希望した。私とはもう数十年来のご近所さんで、同年代が「何かあったら助け合おう、お互いに世話しよう」と言い合って交流を深めていた。

ケアマネさんと、亡夫の療養時にお世話になった訪問看護ステーションに相談したら、すぐに動いてくれた。私も毎日世話に行ったが、看護師さん、ヘルパーさん、ケアマネさんも時間と役割を分担して来てくれた。だんだん歩けなくなり、起き上がれなくなり、氷片をなめるだけになった。それでも笑って「ここに居たい」と伝えた。まだしっかり話せた時、私は二つの願いをされた。「死んだらこの着物を着せてほしい」中学卒業して田舎から出てくる時に、お母さんがお正月に着なさいと持たせてくれたそうだ。もう一つは、一枚の白黒写真で「お棺と一緒にいれて」と。80年代に流行った髪型の美人さんが微笑んでいた。「昔の彼女？」と聞くと照れ臭そうに笑った。お別れの日、息が荒くなっていた。朝、看護師さんが丁寧に拭いてくれて、昼に先生が往診、他の看護師さんやケアマネさんも集まり「Mさん幸せですね」と言う的一生懸命頷いた。その後間もなく息を引き取った。旅立ちの支度は約束通り、看護師さんにあの着物を着せてもらい、写真を胸に挟んで手を添えた。その顔は穏やかで満足気だった。皆さんの誠心誠意のお世話のおかげで、私は大役を果たせました。本当にありがとう。

